

天地創造の初めから

[マタイによる福音書 25 章 31～46 節]

「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」

[1] どんでん返し

「終わりの日にむかってどう整えるか」、それは、誰かほかの人に代わってもらえない「私と神様」・「私とイエス様」の個人的な関係を密にしていくことだ、ということ、先週この同じ 25 章の前半（10 人のおとめのたとえ）を通して聞きました。今日の箇所もそれと無関係ではありませんが、ここには一つの**どんでん返し**のようなことが書かれていると思います。それは、神の国に迎え入れられる人たちが、その御国の住人として認めて頂ける生き様を、まさか自分では気が付かないで表わしていたということ、そしてそれは何か目立ったよう

なことではなくて、目の前の出会った人に対してのささやかな行為についてイエス様が「それは私に対してしてくれたことなのだ。さあ、あなたたちに用意された御国に行きなさい」と言って頂けるということが記されています。

今、イエス様は「それは、わたしにしてくれたことなのである」と語られたと申しましたけれども、それは 25 章 40 節ですが、そこで「この最も小さい者の一人にしたのは」と言われています。このイエス様が「最も小さい者の一人」、口語訳では「いと小さき者」とはどのような人なのでしょう？

注意したいことは、私たちはそのようなことを考える時、自分は小さくないも者だと、どこか自分を高みに置きやすいのです。そして、可哀想な人を援助してあげる。それがキリスト教精神だと思ってしまうことがあるかもしれません。けれども、このイエス様の話の中ではそのような高ぶりは全くありません。

[2] 「最も小さい者の一人」

私は、ここでイエス様が言われている人たちは、一言でいうなら**人生の危機に直面させられている人**ではないかと思います。それは他人事ではないと思います。「**自己肯定感**」を失いかけている人々、と言っても良いかもしれません。イエス様はこう言われました。「(あなたは) 飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」と。戦乱、災害、暴力、貧困、或いは重い病、或いは罪を犯し、閉じ込められている者。そのような時、人は孤独に陥ると思います。そして生きる喜びや意味を感じられず、人は自死さえも考えることが少なくありません。最近、新聞でこのような二つの記事を見ました。一つは、あしなが育英会の調査で、東日本大震災で親を失った子供たちの多くが、親のことを誰かと分かち合うことが出来ないでいたり、親に対して感謝の気持ちもあるけれども、**65%の人が後悔の気持ちをずっと抱えている**というのです。もう一つは埼玉県の調査で、県民の 3.3%にあたる**性的少数者の方**たちが、精神的に追い詰められ、**60%の人が自死を考えたことがある**というのです。これは何を意味するかというと、「**あなたはそれでよいのだ**」と言葉を待っている、ということだと思います。自分をずっと責めてしまい、**自己肯定が出来ない**のです。

私自身のことで恐縮ですが、私は先日母を失って、ちょっと今気持ちが穏やかになれない自分と言いますか、自分を責める自分もあるのです。先日もお話ししましたように母の最期の時は眠るようで、その場において私たちはある意味母が苦しみから解放されて良かったという安堵の気持ちも与えられたのです。しかし、葬儀が終わって、まだ施設にある母の洋服や荷物などを先週少し整理

したのです。そうしたら、そこに母が書いていた日記のような小さな手帳が置いてあったのです。私は母が日記を書いていたなどとは思っていませんでした。ぱらぱらめくってみると、そこには体を殆ど動かすことが出来ない日々の辛さや、お見舞いに来てくれた人への感謝や、その日の天気や気分のことなども書いてありました。そしてある日の日記でこんなことが書いてあったのです。「今日は勉に病院に連れて行ってもらったが、何かすごくイライラしていた。怒鳴っていた。酷い。働きながら牧師もしているので疲れが溜まっているのだろう。こんな体で申し訳ない。」というような文章です。…私の気持ちはお分かりだと思います。思い当たる節があるのです。ああ、おかあさん、ごめんなさい。何て酷い息子だったのだろう。そしてもうその母はいないのです。謝れない。その日は私は気持ちがかかなりブルーになりました。そして、このことは時々思い起こすと思います。**これは私の罪です**。この譬えの中でイエス様が「最も小さい者」にしなかったことは「わたしにしてくれなかったことだ」と裁かれますが、正に私はそうなのです。とても厳しい言葉です。

けれども、これは私の都合の良い解釈なのでしょうか。「いと小さき者」を蔑（ないがし）ろにするものはわたしを蔑ろにするのだと言われたということは、**イエス様はそのような弱い立場に置かれている者と本当に一体化している**、ということではないか！ と思うのです。私自身は本当に限界があるのです。大事な所で優しい言葉や態度を表せず、むしろ傷つけてしまう私です。そして私自身も癒されない思いや傷を持ってしまうのです。けれども、だからこそ、だからこそ、主は私たちの罪を負い、十字架で私たちを贖って下さったのかな。そう思いました。私たちは皆、**心の深いところで赦されたい**のです。「わかっているよ。あなたの気持ちは」と、**この私を受容してくれる声**を聞きたいのです。神様から、イエス様から「大丈夫だよ。私のもとに来なさい。わたしはあなたと共にいるよ」という声を聞きたいのです。そして、それを示すためにイエス様は私たちの所に来て下さったのではないのでしょうか。イエス様は、この羊と山羊とを分ける譬えの中で、機械的に私たちの行ったこと、行わなかったことに応じて永遠を決定されるのかと言えば、そうではないと思います。

[3] 「天地創造の時から」

この主の譬えの中で、よく注意してみて頂きたいのですが、右側に分けられる人々に対しては「**天地創造の時から**」用意されている神の国を受け継ぎなさいと言われて、「天地創造の時から」です。左側に分けられる者に対してはそうは言っていません。**神様のもともとのご意志は救い**なのです！ 滅びではないのです。用意されているのはあくまでも**御国**。これは大きな慰めです！ パ

ウロが書いた「エフェソの信徒への手紙」の初めの所にはこうあります。1章4節から。「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。」これが、神様の変わらないみ心なのです。私たちは今「**神の子**」とされているのです。

「永遠の火」というのは、神様がサタンが行くべき場として用意した所であって、そのサタンの支配というのは、イエス様の十字架と復活によって、その力は基本的に失われているのです。もう私たちがサタンの虜になるということは根本的にはないのですね。しかし、この世にある限り**誘惑は残ります**。サタンは巧みなので、先ほどの私の例もそうですけれども、私たちは、案外身近な者を蔑ろにしてしまうのです。そして後で後悔することが何と多いことか。教会の兄弟姉妹の関係の中でもそれは起こりやすいです。「信仰」を盾に人を裁きやすいですから。そうすると言われた方は全否定されたかのように思ってしまう。牧師が最も注意しなければならないことです。

原点に立ち帰りましょう。私たちは皆**ただイエス様の十字架の赦し**にあっただけなのですね。誰が偉いとかそうでないとか、そういう所から自由にさせて頂きたいです。神様に愛されているお互いとして。この主の譬えは、「飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」時のことを、打算的な思いでしていないですよ。後で当の本人がビックリしています。「いつそのようなことをしましたか？」と。そうです。これは大それたことではなく、日常で出会う人になす当たり前の行為です。でも、一杯の水が「ああ、美味しい！」って言えることって幸せじゃないですか。弱っている時に一言声をかけてくれたり、手紙をくれたり、それが自分自身を肯定させてくれる、また生きる喜びを感じさせてくれることに繋がるじゃないですか。そして、そのことと御国とは繋がっているのですね！身近な**あの人この人の中に主イエス様を見たい**と思います。そして、**私たち自身の中にも主イエスを見て良い**のです。私たちと一体となるためにこそ、主は来て下さったのですから。

天の故郷では、私たちの傷は全て繕われることだと思います。それを楽しみにしたいと思います。私たちが与えられている交わりは、この世にあって、「世にはなき交わり」です。お祈りを致します。